

在校生・卒業生・保護者・教職員

# 進路通信 2014/09 号外

北海道釧路湖陵高等学校進路指導部

## ◆特集 市立病院での体験学習◆

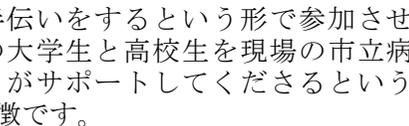
夏休み中の8月5日(火)・6日(水)の2日間、2年生の医療系進学希望者を対象に釧路の市立病院で体験学習をさせていただきました。

医進類型の「高・大・病」(高校・大学・病院)の連携事業として実施されました。札幌医科大学・市立病院・湖陵高校の関係者が一同に会しての体験学習です。

札幌医科大学の学生さんは、「地域医療合同セミナー」という授業を1年生のときから受講してきた学生さんたちで、今回参加しているのは、3年生の方々です。今回の札幌医科大学の学生の体験学習内容は、病院で初めての企画だそうです。が、「メディカルカフェ」の企画立案・実施で



す。高校生は、そのお手伝いをするという形で参加させていただきました。この大学生と高校生を現場の市立病院の医師や看護師の方々がサポートしてくださるというのが今回の体験学習の特徴です。



### ■①プレゼンテーションを聴き、病院見学へ

まずは、市立病院研修医、在原正泰さんによる地域医療に関する

プレゼンテーションを聞くことからスタートしました。在原さんは、本校を卒業して札幌医科大学に進学し、この春、医師の国家試験に合格した研修医の先生です。先輩ということで、生徒にとっては、大変貴重な機会となりました。次に病院見学です。写真はドクターヘリの発着場所です。現場の医師の方の説明を受けました。ここでは、一刻をあらそう患者さんを迅速にしかも安全に病院内に移動させるための「エレベーター？」というか「ゴンドラ」のような乗り物にも乗らせてもらいました。



次に、救命救急について、担当の医師の方から説明を受けました。患者さんの命を守るためのさまざまな工夫や設備に生徒たちは感心させられた様子でした。

ドラマなどでしか見たことのなかった設備にびっくりした生徒もいました。

## ■②大学生・現場の医師・看護師・高校生によるグループワーク

さて、いよいよ、札幌医科大学の学生さんや病院の医師・看護師の方々との共同作業の開始です。メディカルカフェの役割分担(受付・司会など)ごとにグループに分かれ、自己紹介です。単に「自己紹介をしましょう」と言ってもなかなかできるものではありません。そこで、コーディネートをしてくれている市立病院の看護師さんたちは、自己紹介しやすいように、打ち解けやすいように「自己紹介カード」などを準備してくれていました。やはりそういう配慮が陰であるからこそ、この体験学習も成り立つのです。



自己紹介にニックネームなどを記入したりして、少し打ち解けたところで、明日のメディカルカフェについての打ち合わせです。どんなふうに「メディカルカフェ」を実施するか、どうすればお客さんが喜んでくれるか、真剣な話し合いが展開されました。

今回、札幌医科大学の学生の代表(まとめ役)は本校卒業生の本間公さんです。また、市立病院の研修医の方もアドバイザーとして、グループに入ってくれました。研修医の在原正泰さんは前述の通り、本校卒業生であり、札幌医科大学卒業生でもあります。本校の生徒と本校卒業生で札幌医科大学に通っている先輩と、さらに本校を卒業して札幌医科大学に進学し、現在は研修医として活躍している先輩とが一堂に会してのグループ学習。贅沢な環境ですね。



## ■③2日目スタート。打ち合わせ→メディカルカフェ準備

さて、2日目スタートです。打ち合わせの後、病院の一階ロビーにイスを並べて、会場を設営しました。札幌医大の学生さんたちの的確な指示のもと、高校生も協力しました。

札幌医大の学生さんたちの手際のよさにびっくりした高校生もいました。



←札幌医大の学生さんたちは、この日のために授業として、メディカルカフェの企画や運営方法をみんなで検討してきました。

■④いよいよ、「メディカルカフェ」スタート



札幌医科大学、赤坂憲先生の「今日から始める！脱メタボ大作戦」と題した講演が行われました。赤坂先生は今回の札幌医大の学生の指導をされている先生でもあります。

今回のメディカルカフェのおもしろい点は、一方通行の講演会にしなかったということです。学生さんたちは、企画段階から、聴衆と赤坂先生との双方向のやりとりが自然とできるように、まずは講演をしたあと、15分の休憩時間を取り、その間に質問カードを記入してもらいます。質問カードを回収し、いくつかの観点に基づいて仕分けをした上で、ホワイトボードに貼り、質問について赤坂先生にその場で答えてもらうという質問会方式を用いるという工夫がありました。もちろん質問カードを回収したり、その質問内容の仕分けや質問会の司会などは、大学生が中心となって高校生がそれを手伝うという状況でした。これは市民視点のメディカルカフェにするための一工夫でした。

私自身も、「仕事で、毎日ほとんど体を動かす機会がないのですが、メタボリックを解消するために工夫できることはないでしょうか」という質問をカードに書いたのですが、そんな素朴な質問にも、他の聴衆を巻き込みながら、ユーモアを交えつつ、丁寧に答えてくださいました。

市民の視点、患者さんの視点で実施したいという札幌医大の学生さんたちのねらいは、達成できたのではないのでしょうか。



本校生徒も、受付・質問カード回収・そして、質問会の司会アシスタント等として活躍していました。大学生の行動力のすばらしさから学ぶものもあったようです。

■⑤まとめのディスカッション

昼食後は、メディカルカフェの反省（もっとこうすればよかった・こういう配慮が必要だった等）をグループディスカッション形式で行いました。ディスカッションの後は、各グループで話し合った内容を発表しました。このディスカッションには現役の市立病院の看護師さんもグループに加わってくれました。



メディカルカフェの総合司会は  
札幌医科大学 本間公 さん

本間先輩も高校時代に医進類型のメディカル講座に参加し、地域医療に興味を持ち、大学でもこの授業をとったとのこと。そんな先輩から後輩へ。「模試の復習は必ずしよう。そして本当に授業を大切に、目標をめざしてほしい。」メッセージありがとうございました。



グループに加わってくれた看護師さんの一人、浅川紗希さんも本校の卒業生でした。浅川さんは高校生の話に耳を傾けて、高校生が話しやすいように配慮してくれているのが、遠くからでもわかりました。卒業生の職業人としての姿も見ることができて、うれしかったです。本校生徒もさまざまな方の支えのおかげで、発表するなど、がんばっていました。



最後に感想をみんな発表しあって、終了しました。このまとめのディスカッションなどをコーディネートしてくれているのは勿論、市立病院の看護師さんたちですが、コーディネートの仕方などは、研修等で学ぶのだそうです。看護師さん同士の研修でもディスカッションという技法はよく用いるようで、ゆえにコーディネートする技術も同時に学ぶ必要があるとのこと。しかし、「自分で問題意識をもって『学んでみよう』と思わないとなかなか学べないものですよ。」ともおっしゃっていました。仕事をやるようになってからも、自分の技量を上げるための努力は必要なのですね。



真剣に物事に向き合う医療職の方々・学生に接して、そういう人と時間を共有できた喜びを感じることでできた2日間だったと思います。湖陵を卒業して医療の現場や大学で活躍している先輩方との交流もよい刺激になったと思います。夢のまた夢という遠い話ではなく、今の自分は未来の自分とつながっているということも理解できたのではないかと思います。事前説明の時に、ディスカッションでは、「かつこいい意見」「立派な意見」を言おうとする必要はないと伝えました。それよりも、高校生の目線と思うところを言いなさい、黙っているのはよくないという話をしました。それを踏まえて、積極的に行動する姿が見られました。



↑  
札幌医科大学の赤坂先生と記念撮影

■参加生徒のレポートより

○私は2日間、大学生や職員の方々と接して、今の自分よりとても積極的で、気配りがすごいと強く感じた。同時にこんな風になりたいと思った。(中略)また、大学生の方が、「高校生はまだ医療人としての技能はない。けれど、やる気なら持てる。受験もやる気で乗り切ったよ。」という話をしてくださり、印象に残った。(後略)

○医大生や現場の医療職の方々と接して、医療関係者は行動するときに常にたくさんのことを考えているんだなと感じた。(後略)

○大学生の考えとか、意見とか、行動などすべてが、自分にとってとてもよい刺激になった。(後略)

○現場の方と接して一番感じたことは、現場の方は、患者さんがどういう状態か、何をしたいのか、困っているかどうかなどを察する能力に長けていることです。私がどうすればいいのかわからなかったり、気づけなかったことも現場の看護師さんや札幌医大の方はテキパキと対応できていて、自分の未熟さを痛感しました。